

種山ヶ原

宮沢賢治

青空文庫

種山ヶ原たねやまがはらというのは北上山地きたかみさんちのまん中の高原で、青黒いつるつるの蛇紋岩じやもんがんや、硬い橄欖岩かたかんらんがんからできています。

高原のへりから、四方に出たいくつかの谷の底そこには、ほんの五、六軒けんずつの部落ぶらくがあります。

春になると、北上の河谷かこくのあちこちから、沢山たくさんの馬が連れて来られて、此この部落の人たちに預あずけられます。そして、上の野原はなに放はなされます。それも八月の末すえには、みんなめいめいの持主もちぬしにもと戻もどつてしまうのです。なぜなら、九月には、もう原の草が枯かれはじめ水霜みずしもが下りるので、

放牧ほうぼくされる四月よつきの間も、半分ぐらいまでは原は霧きりや雲くもに鎖とざさ

れます。実にこの高原の続きこそは、東の海の側からと、西の方からとの風や湿気のお定まりのぶつつかり場所でしたから、雲や雨や雷や霧は、いつでももうすぐ起つてくるのでした。それですから、北上川の岸からこの高原の方へ行く旅人は、高原に近づくに從つて、だんだんあちこちに雷神の碑を見るようになります。その旅人と云つても、馬を扱う人の外は、薬屋か林務官、化石を探す学生、測量師など、ほんの僅かなものでした。今年も、もう空に、透き徹つた秋の粉が一面散り渡るようになりました。

雲がちぎれ、風が吹き、夏の休みももう明日だけです。

達二は、明後日から、また自分で作つた小さな草鞋をはいて、

二つの谷を越えて、学校へ行くのです。

宿題もみんな済ましたし、蟹を捕ることも木炭を焼く遊び

も、もうみんな厭きていました。達二は、家の前の檜によりかか
つて、考えました。

(ああ。此の夏休み中で、一番面白かったのは、おじいさんと

一緒に上の原へ仔馬を連れに行つたのと、もう一つはどうして

も剣舞だ。鶏の黒い尾を飾つた頭巾をかぶり、あの昔からの赤

い陣羽織を着た。それから硬い板を入れた袴をはき、脚絆や

草鞋をきりつとむすんで、種山剣舞連と大きく書いた沢山

の提灯に囲まれて、みんなと町へ踊りに行つたのだ。ダー、

ダー、ダースコ、ダー、ダー。踊つたぞ、踊つたぞ。町のまっ赤

な門火かどびの中で、刀をぎらぎらやらかしたんだ。櫛夫ならおさんと一緒に
なつた時などは、刀がほんとうにカチカチぶつつかつたぐらいだ。

ホウ、そら、やれ、

むかし 達谷たつこくの 悪路王あくろおう、

まつくらあくらの二里ほらの洞、

渡るわたは 夢ゆめと 黒夜神こくやしん、

首きびは刻きざまれ 朱桶しゅおけに埋うもれ。

やったぞ。やったぞ。ダー、ダー、ダースコ、ダーダ、

青い 仮面めんこの こけおどし、

太刀たちを 浴あびては いっぷかぷ、

夜風よかぜの 底そこの 蜘蛛くもおどり、

胃袋いぶくろう はいて ぎつたりぎたり。

ほう。まるで、……)

「達二たつじ。居おるが。達二。」達二のお母さんが家の中で呼よびました。
「あん、居おる。」達二は走はつて行いきました。

「善よい童わらわだはんてな、おじいさんと、兄あいなど、上あの原はらのすぐ上うり口くちで、草刈かつてるがら、弁べん当とう持もつて行いつて来こ。な。それがら牛うしも連つれてつて、草食かあせで来こ。な。兄あながら離はななよ。」

「あん、行いて来こる。行いて来こる。今いま草鞋わらじ穿はぐがら。」達二ははねあがりました。

お母おさんは、曲まげ物ものの二ふたつの櫃ひつと、達二たつじのち小こさな弁べん当とうとを紙かみにくるんで、それをみんな一いっ緒しょに大おきな布ぬのの風呂敷ふうしきに包つつみ込こみ

ました。そして、達二が支度したくをして包みを背負せおっている間に、おつかさんは牛をうまやから追おい出しました。

「そだら行つて来ら。」と達二は牛を受け取とつて云いました。

「氣い付つけで行げ。上で兄あいながら離はなれなよ。」

「あん。」達二は、垣根かきねのそばから、楊やなぎの枝を一本折おり、青い皮かわをくるくる剥はいで鞭むちを拵こしらえ、静しずかに牛を追いながら、上の原への路みちをだんだんのぼって行きました。

「ダーダー、スコ、ダーダー。」

夜の頭巾ずきんは 鶏とりの黒尾くろお、

月のあかりは……………、

しつ、歩け、しつ。」

日がカンカン照てっていました。それでもどこかその光に青い油あぶらの疲つかれたようなものがありましたし、また、時々、冷つめたい風が紐ひものようにどこからか流ながれては来ましたが、まだ仲なかなか々々暑あついのでした。牛が度たびたび々々立ち止まるので、達二は少し苛いら々々しました。

「上さ行いつて好いい草食え。早く歩あげつ。しつ。馬鹿ばかだな。しつ。」
 けれども牛は、美しい草を見る度に、頭しを下したげて、舌したをべらりと廻まわして喰たべました。（牛の肉の中で一番上じょうとう等らが此この舌しただといいうのは可お笑かしい。涎よだれで粘ねばねば々々してる。おまけに黒くろい斑ぶちぶち々々がある。歩あけ。こら。）

「歩あげ。しつ。歩あげ。」

空そらに少しばかりの、白しろい雲うみが出でました。そして、もう大分おほいのぼ

つていました。谷の部落がずっと下に見え、達二の家の木小屋の屋根が白く光っています。

路が林の中に入り、達二はあの綺麗な泉まで来ました。まっ白の石灰岩は、ごぼごぼ冷たい水を噴き出すあの泉です。達二は汗を拭いて、しゃがんで何べんも水を掬ってのみました。

牛は泉を飲まないで、却って苔の中のたまり水を、ピチャピチャ嘗めました。

達二が牛と、またあるきはじめたとき、泉が何かを知らせる様に、ぐうつと鳴り、牛も低くうなりました。

「雨になるかも知れないな。」と達二は空を見て眩きました。林の裾の灌木の間を行ったり、岩片の小さく崩れる所を何

べんも通つたりして、達二はもう原の入口に近くなりました。

光つたり陰つたり、幾重にも畳む丘々の向うに、北上の野

原が夢のように碧くまばゆく湛えています。河が、春日大明神の帯のように、きらきら銀色に輝いて流れました。

そして達二は、牛と、原の入口に着きました。大きな櫓の木の下に、兄さんの縄で編んだ袋が投げ出され、沢山の草たばがあちこちにころがっていました。

二匹の馬は、達二を見て、鼻をふるふる鳴りました。

「兄な。居るが。兄な。来たぞ。」達二は汗を拭いながら叫びました。

「おおい。ああい。其処に居ろ。今行くぞ。」

ずうつと向うむこの窪くぼみで、達二の兄さんの声がしました。牛は沢山の草を見ても、格別かくべつうれ嬉しそうにもしませんでした。

陽ひがぱつと明るくなり、兄さんがそつちの草の中から笑わらつて出て来ました。

「善ゆぐ来たな。牛も連れで来たのが。弁べん当とう持もつてが。善ゆぐ来た。今日ひるあ午ひるまがらきつと曇くもる。俺おらもう少し草あつ集あつめて仕舞しむがらな、此こ処こらに居いろ。おじいさん、今来る。」

兄さんは向むこうへ行むこうとして、振ふり向むいてまた云いいました。

「腹減はらへつたら、弁べん当とう、先たに喰たべてろ。風呂敷ふろしきば、あの馬うまさ結付ゆいつけでおげ。午ひるまになつたらまた来るがら。」

「うん。此処こゝに居いる。」

そして達二の兄さんは、行つてしまいました。空にはうすい雲がすつかりかかり、太陽たいようは白い鏡かがみのようになって、雲と反対はんたいに馳はせました。風が出て来て刈かられない草は一面いちめんに波なみを立てます。

どうしたのか、牛にわが俄にわかに北の方へ馳せ出しました。達二はびつくりして、一生懸命けんめい追いかけてながら、兄の方に振り向いて叫さけびました。

「牛あ逃にげる。牛あ逃げる。兄あいな。牛あ逃げる。」

せいの高い草を分けて、どんどん牛が走りました。達二はどこまでも夢むちゆう中で追いかけてました。そのうちに、足が何だか硬張こわばつてきて、自分で走っているのかどうか判わからなくなつてしまいました

た。それからまわりがまつ蒼さおになつて、ぐるぐる廻まわり、とうとう達二は、深い草ふかの中に倒たおれてしまいました。牛の白い斑ふちが終おわりにちらつと見えしました。

達二は、仰あおむ向けになつて空を見ました。空がまつ白に光つて、ぐるぐる廻り、そのこちらを薄うすい鼠ねずみ色の雲が、速はやく速く走つています。そしてカンカン鳴つています。

達二はやつと起おき上つて、せかせか息いきしながら、牛の行つた方に歩き出しました。草の中には、牛を通つた痕あとらしく、かすかな路みちのようなものがありました。達二は笑わらいました。そして、（ふん。なあに、何ど処かでのっこり立つてるさ。）と思ひました。

そこで達二は、一生懸命それを跡つけて行きました。ところがそ

の路のようなものは、まだ百歩も行かないうちに、おとこえしや、すてきに背^{せいたか}高^{あざみ}の薊^{あざみ}の中で、二つにも三つにも分れてしまつて、どれがどれやら一^{いつこう}向^むわからなくなつてしまいました。達^{たつじ}二は思^しい切^きつて、そのまん中^{ちゆう}のを進^{すす}みました。けれどもそれも、時々断^きれたり、牛の歩かないような急^{きゆう}な所^{ところ}を横^{よこ}様^{さま}に過^すぎたりするのでした。それでも達^{たつじ}二は、

(なあに、向^むうの方^{むかひ}の草^{くさ}の中で、牛はこつち向^むいて、だまつて立つてるさ。)と思^{おも}いながら、ずんずん進^{すす}んで行^いきました。

空^{そら}はたいへん暗^{くら}く重^{おも}くなり、まわりがぼうつと霞^{かす}んできました。冷^{つめ}たい風^{かぜ}が、草^{くさ}を渡^{わた}りはじめ、もう雲^{くも}や霧^{きり}が、切^きれ切^きれになつて眼^めの前^{まへ}をぐんぐん通^{とほ}り過^すぎて行^いきました。

（ああ、こいつは悪くなつてきた。みんな悪いことはこれから集たかつてやつて来るのだ。）と達二は思いました。全くその通り、俄にわかに牛の通つた痕は、草の中で無くなつてしまいました。

（ああ、悪くなつた、悪くなつた。）達二は胸をどきどきさせました。

草がからだを曲げて、パチパチ云つたり、さらさら鳴つたりしました。霧が殊ことに滋しげくなつて、着物きものはすっかりしめつてしまいました。

達二は咽喉のど一杯いっぱい叫びました。

「兄あいな。兄あいな。牛あ逃げだ。兄あいな。兄あいな。」

何の返事へんじも聞えませんが。黒板こくばんから降ふる白墨はくぼくの粉こなのような、

くらつめ
暗い冷たい霧の粒が、そこら一面踊りまわり、あたりが俄にシンとして、陰気に陰気になりました。草からは、もう雫の音がポタリポタリと聞えてきます。

達二は早く、おじいさんの所へ戻ろうとして急いで引返しました。けれどもどうも、それは前に来た所とは違っていたようです。第一、薊があんまり沢山ありましたし、それに草の底にさつき無かつた岩かけが、度々ころがっていました。そしてとうとう聞いたこともない大きな谷が、いきなり眼の前に現われしました。すすきが、ざわざわざわつと鳴り、向うの方は底知れずの谷のように、霧の中に消えているではありませんか。

風が来ると、芒の穂は細い沢山の手を一ぱいのぼして、忙しく

振^ふつて、

「あ、西さん、あ、東さん、あ西さん。あ南さん。あ、西さん。」
なんて云^いつてゐる様^{よう}でした。

達二はあんまり見つともなかつたので、目を瞑^{つぶ}つて横^{よこ}を向^むきました。そして急^{いそ}いで引^ひつ返^{かえ}しました。小さな黒い道が、いきなり草の中に出て来^きました。それは沢^{たく}山^{さん}の馬^{ひづめ}の蹄^{あと}の痕^{あと}で出来上^{できあ}つていたのです。達二は、夢^{むちゆう}中で、短^{みじ}い笑^{わら}い声をあげて、その道をぐんぐん歩^あきました。

けれども、たよりのないことは、みちのはばが五寸^{すん}ぐらいになつたり、また三尺^{しゃく}ぐらいに變^{かわ}つたり、おまけに何^{なに}だかぐるつと廻^{まわ}つてゐるよう^{よう}に思^{おも}われました。そして、とうとう、大き^{おほ}なてつぺ

んの焼けた栗の木の前まで来た時、ぼんやり幾つにも岐れてしま
いました。

其処は多分は、野馬の集まり場所であつたでしょう、霧の中に
円い広場のように見えたのです。

達二はがっかりして、黒い道をまた戻りはじめました。知らな
い草穂が静かにゆらぎ、少し強い風が来る時は、どこかで何か
合図をしてでもいるように、一面の草が、それ来たつとみなか
らだを伏せて避けました。

空が光つてキーンキーンと鳴っています。それからすぐ眼の前
の霧の中に、家の形の大きな黒いものがあらわれました。達二は
しばらく自分の眼を疑つて立ちどまっていました。やはりどう

しても家らしかったので、こわごわもつと近寄つて見ますと、それは冷たい大きな黒い岩でした。

空がくるくるくるつと白く揺らぎ、草がバラツと一度に雫を払いました。

(間違つて原を向う側へ下りれば、もうおらは死ぬばかりだ。)
と達二は、半分思う様に半分つぶやくようにしました。それから叫びました。

「兄な、兄な、居るが。兄な。」

また明るくなりました。草がみな一斉に悦びの息をします。

「伊佐戸の町の、電気工夫の童あ、山男に手足い縛らえてたふうだ。」といつか誰かの話した語が、はつきり耳に聞えて来ます。

そして、黒い路みちが、俄にわかに消えてしまいました。あたりがほんのしばらくしいんとなりました。それから非常ひじょうに強い風が吹ふいて来きました。

空が旗はたのようにぱたぱた光ひるって翻ひるえり、火花がパチパチパチツと燃もえました。

達たつじ二はいつか、草たおに倒たおれていました。

そんなことはみんなぼんやりしたもやの中の出来事できごとのようでした。牛が逃にげたなんて、やはり夢ゆめだかなんだかわかりませんでした。風だつて一体吹ふいていたのでしうか。

達二はみんなと一いっしょ緒しょに、たそがれの県道けんどうを歩いていたのです。

い提灯ちようちんが沢山たくさん点され、達二の兄さんが提灯もを持って来て達二と並ならんで歩きました。兄さんの足が、寒天かんてんのようで、夢ゆめのような色で、無暗むやみに長いのでした。

「ダー、ダー、ダー、ダー。ダー、スコ、ダーダー。」

町はずれの町長のうちでは、まだ門火かどびを燃していませんでした。その水松樹いちいの垣かきに囲かこまれた、暗くらい庭にわさきにみんな這入はいって行きました。

そして達二はまたうとうとしました。そこで霧きりが生温なまぬるい湯ゆのようになつたのです。可愛かわいらしい女の子が達二を呼よびました。

「おいでなさい。いいものをあげましょう。そら。干ほした苹菓りんごですよ。」

「ありがど、あなたはどなた。」

「わたし誰だれでもないわ。一緒いっしょに向うむこへ行つて遊びあそみましょう。あ

なた驢馬ろばを有もつていて。」

「驢馬ろばは持もつてません。只ただの仔馬こうまならあります。」

「只の仔馬は大きくて駄目だめだわ。」

「そんなら、あなたは小鳥きりは嫌いきらいですか。」

「小鳥。わたし大好きだいすよ。」

「あげましょう。私わたくしはひわを有もつています。ひわを一疋ひきあげまし

ようか。」

「ええ。欲ほしいわ。」

「あげましょう。私今持もつて来きます。」

「ええ、早くよ。」

達二は、一生懸命、うちへ走りました。美しい緑色の野原や、小さな流れを、一心に走りました。野原は何だかもくもくして、ゴムのようでした。

達二のうちは、いつか野原のまん中に建っています。急いで籠を開けて、小鳥を、そとつかみました。そして引つ返そうとしましたら、

「達二、どこさ行く。」と達二のおつかさんが云いました。

「すぐ来るから。」と云いながら達二は鳥を見ましたら、鳥はいつか、萌黄色の生菓子に変わっていました。やっぱり夢でした。

風が吹き、空が暗くて銀色です。

「伊佐戸の町の電気工夫のむすこあ、ふら、ふら、ふら、ふら、
ふら、」とどこかで云っています。

それからしばらく空がミンミンと鳴りました。達二はまた
うとうとしました。

山男が櫛の木のうしろからまつ赤な顔を一寸出しました。

(なに怖いことがあるもんか。)

「こりや、山男。出はつて来。切つてしまうぞ。」達二は脇差し
を抜いて身構えしました。

山男がすっかり怖がつて、草の上を四つん這いになってやつて
来ます。髪が風にさらさら鳴ります。

「どうか御免御免。何じよなことでも為んす。」

「うん。そんだったら許してやる。蟹を百足捕って来。」

「ふう。蟹を百足。それ丈けでようがすかな。」

「それがら兎を百足捕って来。」

「ふう。殺してきてもようがすか。」

「うんにや。わがんだい。生きだのだ。」

「ふうふう。かしこまた。」

油断をしているうちに、達二はいきなり山男に足を捉まいて倒されましました。山男は達二を組み敷いて、刀を取り上げてしましました。

「小僧。さあ、来。これから、俺れの家来だ。来う。この刀はいい刀だな。実に焼きをよぐかげである。」

「ばが。奴の家来になど、ならない。殺さば殺せ。」

「仲々ず太いやづだ。来つたら来う。」

「行がない。」

「ようし、そんならさらつて行く。」

山男は達二を小脇にかかえました。達二は、素早く刀を取り返して、山男の横腹をズブリと刺しました。山男はばたばた跳ね廻つて、白い泡を沢山吐いて、死んでしまいました。

急にまつ暗になつて、雷が烈しく鳴り出しました。

そして達二はまた眼を開きました。

灰色の霧が速く速く飛んでいます。そして、牛が、すぐ眼の前に、のっそりと立っていたのです。その眼は達二を怖れて、横

の方を向むいていました。達二は叫さけびました。

「あ、居いだが。馬鹿ばかだな。奴うなは。さ、歩あべ。」

かみなり

雷と風の音との中から、微かすかに兄さんの声が聞えました。

「おおい、達二。居いるが。達二。達二。」

達二はよろこんでとびあがりました。

「おおい。居る、居る。兄あいなあ。おおい。」

達二は、牛の手綱たづなをその首から解といて、引きはじめました。

黒い路みちがまたひよつくり草の中にあられられました。そして達二

の兄さんが、とつぜん、眼の前に立ちました。達二はしがみ付つき

ました。

「探さがしたぞ。こんな処どこまで来て。何なして黙だまって彼処あそこに居いないが

った。おじいさんうんと心配しんぱいしてるぞ。さ、早くはや歩あべ。」

「牛にあ逃げだだも。」

「牛あ逃げだ。はあ、そうが。何にびつくりしたたがな。すつかりぬれだな。さあ、俺おらのけら着きろ。」

「一向いっこうさむ寒さむぐない。兄あなのなは大きくて引き擦するがらわがんだい。」

「そうが。よしよし。まず歩あべ。おじいさん、火あたいて待まってるがらな。」

緩ゆるい傾けい斜しゃを、二つ程ほどのほ昇おり降おりました。それから、黒くろい大おほきな路みちについて、暫しばらく歩あきました。

稻いな光なびかりが二度にどばかり、かすかに白しろくひらめきました。草くさを焼や

く匂においがして、霧きりの中を煙けむりがほつと流ながれています。

達二たつじの兄あにさんが叫さけびました。

「おじいさん、居いだ、居いだ。居いだ。達二あ居いだ。」

おじいさんは霧きりの中に立たつていて、

「ああそうが。心配しんぱいした、心配しんぱいした。ああ好えがった。おお達二。寒さむがべあ、さあ入れ。」と云いいました。

半分に焼けた大きな栗くりの木の根ねもとに、草で作った小さな囲かこい
があつて、チヨロチヨロ赤い火が燃もえています。

兄あにさんは牛を櫛ならの木につなぎました。

馬もひひんと鳴ないています。

「おおむぞやな。な。何なぼが泣ないだがな。さあさあ団子だんごたべろ。

食べる。な。今こつちを焼ぐがらな。全体何処まで行つてだつ

た。」

「笹長根ささながねの下り口だ。」と兄が答えました。

「危あぶないがつた。危あぶないがつた。向うさ降むこりだらそれつ切りだつたぞ。

さあ達二たつじ。団子喰だんごたべる。ふん。まるつきり馬こみだいに食つてる。

さあさあ、こいづも食べる。」

「おじいさん。今のうちに草片かたづ附かたづげで来るべが。」と達二の兄さんが云いました。

「うんにや。も少し待まて。またすぐ晴れる。おらも弁当べんとう食うべ。

ああ心配おらした。俺も虎とらこ山の下まで行つて見で来た。はあ、まんつ好えがった。雨も晴れる。」

「今朝ほんとに天気好がったのにな。」

「うん。また好くなるさ。あ、雨漏つてきた。草少し屋根さかぶせろ。」

兄さんが出て行きました。天井がガサガサガサガサ云います。おじいさんが、笑いながらそれを見上げました。

兄さんがまたはいって来ました。

「おじいさん。明るくなった。雨あ霽れだ。」

「うんうん。そうが。さあ弁当当食つてで草片附げべ。達二。弁当食べろ。」

霧がふつと切れしました。陽の光がさつと流れて入りました。その太陽は、少し西の方に寄ってかかり、幾片かの蟬のような

霧が、逃にげおくれて仕しかた方なしに光りました。

草からは雫しずくがきらきら落ち、総すべての葉はも茎くきも花も、今年の終おわりの陽の光を吸すっています。

はるかむこの北きた上かみの碧あおい野原は、今泣なきやんだようにまぶしく笑わらい、向むこうの栗くりの木は、青い後光はなを放はなちました。

青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「【新】校本宮澤賢治全集 第八巻 童話※」#口

ーマ数字1、1-13-21】 本文篇」筑摩書房

1995（平成7）年5月25日初版第一刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※底本巻末の大塚常樹氏による注釈は省略しました。

※表題は底本では、「種山ヶ原《たねやまがはら》」となってい

ます。

※「町はずれの町長のうちでは、まだ門火《かどび》を燃して
いませんでした。その水松樹《いちい》の垣《かき》に囲《かこ》
まれた、暗《くら》い庭《にわ》さきにみんな這入《はい》って
行きました。」と「そして達二はまたうとうとしました。」の
行間に、底本の親本の104、105頁にあたる下記の文章が脱落して
いるのは底本通りです。

「小さな奇麗な子供らが出て来て、笑って見ました。いよいよ
大人が本気にやり出したのです。

「ホウ、そら、遣れ。ダー、ダー、ダー、ダー、ダー、スコ、ダ
ーダー。」「ドドーン ドドーン。」

「#ここから1字下げ」

「夜風さかまき ひのきはみだれ、

月は射そゝぐ 銀の矢なみ、

打うつも果てるも 一つのいのち、

太刀《たあち》の軋《きし》りの 消えぬひま。 ホツ、ホ、ホ
ツ、ホウ。」

「#ここで字下げ終わり」

刀が青くぎらぎら光りました。梨の木の葉が月光にせわしく動いて
てゐます。

「ダー、ダー、スコ、ダーダー、ド、ドーン、ド、ドーン。太
刀はいなづま すゝきのさやぎ、燃えて……」

組は二つに分れ、劍がカチカチ云ひます。青仮面《あをめん》が出て来て、溺死《いっつぶかつぶ》する時のやうな格好《かつこう》で一生涯命跳ね廻ります。子供らが泣き出しました。達二《たつじ》は笑ひました。

月が俄かに意地悪い片眼になりました。それから銀の盃のやうに白くなって、消えてしまひました。

（先生の声がする。さうだ。もう学校が始まつてゐるのだ。）と達二は思ひました。

そこは教室でした。先生が何だか少し瘠せたやうです。

「みなさん。楽しい夏の休みももう過ぎました。これからは気持ちのいゝ秋です。一年中、一番、勉強にいゝ時です。みなさんは

あしたから、又しっかり勉強をするのです。

どなたも宿題はして来たでせうね。今日持って来た方は手をあげて。」

達二と櫛夫さんと、たった二人でした。

「明日は忘れないでみなさん持って来るのですよ。もし、ぜんたい、してしまはなかつた人があつても、やはりその儘、持って来るのです。すっかりしてしまはなかつた人は手をあげて。」

誰も上げません。

「さうです。皆さんは立派な生徒です。休み中、みなさんは何をしましたか。そのうちで一番面白かつたことは何ですか。達二さん。」

「おちいさんと仔馬を集めに行つたときです。」

「よろしい。大へん結構です。櫓夫さん。あなたはお休みの間に、何が一番楽しかったのですか。」

「剣一舞《ばひ》です。」

「剣一舞《ばひ》をあなたは踊つたのですか。」

「さうです。」

「どこでゝすか。」

「伊佐戸《いさど》やあちこちです。」

「さうですか。まあよろしい。お座りなさい。みなさん。外にも剣舞に出た人はありますか。」

「先生、私も出ました。」

「先生、私も出ました。」

「達二さんも、さうですか。よろしい。みなさん。剣舞《けんばひ》は決して悪いことはありません。けれども、勿論みなさんの中にそんな方はないでせうが、それでお金を貰ったりしてはなりません。みなさんは、立派な生徒ですから。」

「先生。私はお金を貰ひません。」

「よろしい。さうです。それから……。」

達二は、眼を開きました。みんな夢でした。冷たい霧や雫が額に落ちました。空は霧で一杯で、なんにも見えません。俄かに明るくなったたり暗くなったりします。一本のつりがねさうが、身体を屈めて、達二をいたはりました。」

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年9月5日作成

2017年7月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

種山ヶ原

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>